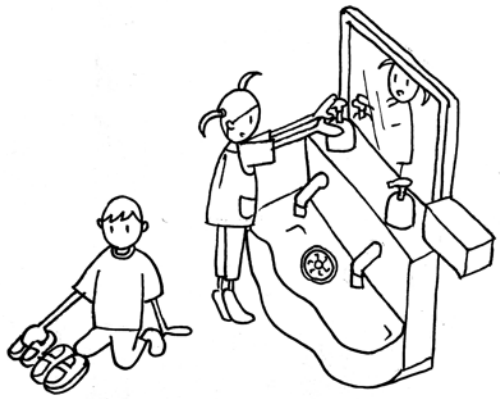
みくにだより

No.751 令和 6 年 7 月 1 日発行



「見えないものの尊さ」

「せんせいずっとおはなししてたいへんじゃない」
はっとさせられました。年長のお子さまからかけられた言葉です。子どもたちの言葉は、当然のことながら予告なく突然ですので、驚きが倍増します。「子どもってすごい」とふとした時に心が動く、それが他の職種にはない保育者の醍醐味であると思っています。

冒頭のこの言葉は、手賀の丘宿泊保育に向けて出発したバスの車内でのこと。宿泊保育への期待を高め、車内での約束事を話し終え着席したわたしに、隣にいたお子さまがかけたものでした。他者を見る、感じとる、言語化する、伝える……たったの５年ほどを生きてきた子どもの成長が見えた瞬間でした。一人の人間として尊敬！心の底から子どもってすごい！（なので、それを逃さずに伝えようと、瞬間的に子どもを抱き締めたり、微笑んだり、グッドサインを出したりしてしまうわたしです。一人で微笑むわたしを見かけたら、きっと何かがあったのだろうとお察しください）。

さて、子どもの素晴らしさを感じながら良いスタートをきった宿泊保育。ほんの一部分ですがお伝えしようと思います。食事のおかわりの際は、お皿を持って食堂の方のところに行き、「おかわりをください」と自分で言います。園やご家族以外の初めて会う方に話しかけるのはドキドキするようで、表情から緊張感が伝わってきました。他者とのふれあいの経験です。また、施設の広い芝生には、シロツメクサが咲いていたりオオバコが生えていました。追いかけっこ、シロツメクサの花冠作り、オオバコ相撲などそれぞれ思い思いの時間を過ごしました。芝生に生えている雑草にも「これなに」「なんていうの」と興味をもっていたお子さまもおり、駅前という立地で過ごす子どもたちが自然に触れる機会となりました。特に印象的だったのが、自然散策中。かたつむり、ダンゴムシ、ナナフシなどがいると知った子どもたちそれぞれがあっちに行きこっちに行きと動いており、いい場面でした。子どもはそれでいいのです。もちろん場面によっては整列する大切さもありますが、この状況で大切にすべきものは……明確ですね。わたしたちは整列して言われたままに動く子どもたちではなく、一人ひとりが主体的に動く子どもたちであってほしいと願っています。広い芝生で走りたくなる、虫を探したくなるなど、その時その時の興味にまっすぐな子どもらしさ、その子らしさを大切にしたいものです。

今回の園だよりを書きながら、「このことを言っているのだ」と感じた一節を載せます。わたしたち保育者が必ず学ぶ倉橋惣三さんという教育者の著書「育ての心」の一節です。

> 「自ら育つものを育てようとする心、それが育ての心である。世にこんなに楽しい心があろうか。それは明るい世界である。温かい世界である。育つものと育てるものとが、互いの結びつきに於て相楽しんでいる心である。育ての心。そこには何の強要もない。無理もない。育つものの偉きな力を信頼し、敬重して、その発達の途に遵うて発達を遂げしめようとする。役目でもなく、義務でもなく、誰の心にも動く真情である。しかも、この真情が最も深く動くのは親である。次いで幼き子等の教育者である。欺うも自ら育とうとするものを前にして、育てずしてはいられなくなる心、それが親と教育者の最も貴い育ての心である。」

今年度の３分の１が経とうとしています。お子さま一人ひとりがその子らしく成長しています。それは目になかなか見えなくても、確実にその一途をたどっています。保護者の方と一緒に目を離すことなく今の姿をしっかりと見ていきます。

平年より遅い梅雨入りをし、天候によっては体調にあらわれる方もいるかもしれません。今月も子どもたち、保護者の方、先生方、皆さんが健康で過ごされますように願っております。